たより

ユッカの会会報 第19号 平成19年12月15日(土)発行
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター12階
かながわボランティアセンター(情報コーナー)内 ユッカの会代表 沼波万里子

末ながい活動を・・・・・

沼波 万里子

月日の経ちますのは本当に早く、来年は平成20年、そうして当ユッカの会も20周年を迎えます。終戦後60余年、中国からの帰国者への対応もようやく改善されつつあるものの、当時真のご苦労をされた方々はわたし同様高齢となり、取り返す術のない歳月を返りみますと何か空しい気がいたします。もう二度とこのような悲劇の起こらぬよう世界の平和を祈らずにはいられません。

温暖化に次ぐ天災も跡をたたず、地球自体が狂い始めている昨今、宇宙の一惑星に過ぎない地球上で無益な殺生を繰り返すことのなんと愚かなことでしょう。

ましてや宗教の対立による争いの根深さには身震いする想いがいたします。

幸い日本はテロもなく平和を保たれてはおりますもののその一面、恨みもなく原因不明に等しい殺人のニュースがあまりにも多く、かけがえのないたった一つの命の尊さをもっともっと認識して欲しいと切に思います。

私も今年は2か月近い入院生活に5時間半にわたる手術を受け、今更のように生きていることのありがたさを痛感いたしました。ただ、退院後ようやく快方に向かいましたものの、今度は輸血による後遺症で皮膚症害をおこし、今もって治療中でございます。

当会の活動は刻明にご報告を受けておりますが、何分思うに任せぬ状態のまま、何のお力にもなれず申しわけない気持ちでいっぱいです。

イベントの参加者も増加している現在、ボランティアの方々のご努力、ご苦労いかばかりかと察しられます。帰国者二世三世の若い方々のご助力を得て、どうか心一つに末長い活動を続けてゆかれますよう、更には会員の皆様のご健康を心からお祈り申し上げます。

砲火まじえ何ぞ争うおろかさよ
異変きざせる青き地球に

(ユッカの会代表)

外国語を学ぶ事の難しさ

岡部 祐未子

語学ボランティアを始めて１年半が過ぎました。日本語は話せても、正しい日本語を話すのは難しいとつくづく感じます。

日本人でさえ正しく使えていない昨今、その国の人と同じように話せるようになるのは何年かかるのだろうか？ 10年以上日本で暮らしている人達でも難しいようです。

私も中国語の勉強をしていますが、自分が正しく話せているのか？ 中国の人にどのように聞こえているのか？ 話す時は、いつも間違っているのではないか？と不安に思います。早く流暢に話せるようになりたいという願望でいっぱいなのですが、現実はなかなか思うようにはいきません。

以前ある人が「語学は大きな川を小舟で漕いで上がって行くようなもので、漕ぐのを止めれば、すぐ後に戻されてしまう」と言っていたことが心に残っています。とは言っても実践するのはなかなか難しく、普段ついつい学ぶ事をさぼってしまい、思うように進歩しない自分が情けなく思います。

そんな時“継続は力なり”という言葉を思い出し、少しずつ学んでいます。

最後にこの事について、子供に関しては例外だと思っています。

（横浜教室・ボランティア）

白神山地紀行

周 轶敏

夏休みも残り少なくなった8月の末に、夫と一緒にずっと憧れていた東北地方への旅に出掛けた。

山歩きの初級者のための三日間の周遊ツアーに参加した。まず東京から福島まで新幹線に乗り、福島から青森までバスに運ばれた。

白神山地はその二日目だった。一日目からガイドさんに「白神山地はこのツアーのクライマックスですよ」と煽られてきたので朝早く起きたにもかかわらず元気一杯。

バスに乗ってまもなく白神山地到着。途中ガイドさんから白神山地のブナ林が日本で最初に世界遺産に登録されたことを知り、期待がますます膨んできた。

入口に入ってすぐ緑に包まれた。世界遺産に登録されたこともあって、人の手の全く入っていない、ありのままの原生林が目の前に現われた。野獣がどこからか現われそうな雰囲気の狭い山道を進んだ。途中に滝もあり清流もあって、それらに

惹かれてちょっとだけ水遊びをした。山の水だけあって、冷たくてとても気持ちがよかった。この自然と一体になりたいと思った瞬間の自分の姿を残したいと思って、夫に写真を撮ってもらい、もっていたペットボトルに滝の水をたっぷり汲んだ。

水遊びを終えて更に先へ進み、ブナ林に辿り着いた。ブナ林の中を歩くのがはじめてだから、その景色は想像を絶するものだった。くる途中バスから見る白神山地の山は緑一色だったが、中から見ると、まるで秋のようになにから何までが黄色になっている。20メートルもある巨大なブナの木が所々に真っすぐに立っていて、木と木の間は広々として遠くまで視野が広がる。あまり葉っぱがなかったなと思って、木の上を見たら、ちゃんとした葉っぱがしっかり生えているではないか。しかも葉っぱはまるで屋根のように日差しや雨をしっかりふせいでくれて、森の中を巨大な室内空間のようにしてくれているのだ。この空間に立った私たちは、ひたすら自然の力に驚いたのであった。

そしてもう一つ私を魅了させたのは、ブナの木から枝垂れている藤のつるだった。ほぼすべての木に藤のつるが付いていた。藤を辿ってみると、驚いたことに、土から木に沿って登った藤が、木の先まで登ってそこからまた下に戻り地面に辿り着いている。いったい何年をかけてこの素晴らしい距離を伸ばしたのだろうかと思わず感嘆した私。

ブナ林を満喫した私が帰りのバスで滝の水を飲みながら夫に“また来ようね”と言ったら、“うん、また見に来たい”と返事してくれた。（横浜教室・学習者）

今年の夏

葉 明珠

八月の初めごろ、友人と新丸ビルへ遊びに行きました。友人は「その日は最高気温が37度」と天気予報を聞いて「ちゃんと日除けの予防をしてね」と教えてくれました。

最初私達は新丸ビルのレストラン街を廻ってどのレストランにしようかすごく悩んでいました。やっと“Salt”というレストランに決めました。そこで美味しいフランス料理を食べたり、喋ったりとてもリラックスしました。友人は3時のスカイバス東京ツアーを予約しました。その観光バスは皇居、銀座、丸の内等々のコースを廻りました。楽しいけど暑いので、ちょっと疲れました。降りた後で私達はすぐ新丸ビルへ入って、アイスクリームを食べてほっとしました。それから新丸ビルでウインドーショッピングをしました。そこでいろいろ面白い物や高級な物を見て楽しかったです。そして丸ビルへ行ってレスト

ランに書かれている掲示板の案内を見て、二人共オムライスを食べたかったので早速“満天星”と言うグリルレストランでオムライスを食べて、とても満足しました。そろそろ夜8時になるので帰る為東京駅に向かって歩いていたのですが、ものすごく暑かったのでびっくりしました。

今年日本の夏は異常な暑さでした。もしかして地球温暖化の影響でそうなって来たのかな？ 地球温暖化の問題は深刻に受け止めないと私達の生活環境は段々危なくなって来ると思っています。

（横浜教室・学習者）

街中の思い出の音色

山田 和子

私のふるさと岡山市、の懐かしいメロディー。

♪ミーソソ・ミーレド・レーミソーミレ～♪ 夕方5時になると毎日、旭川の川べりに建つ岡山県庁から流れてくる「遠き山に日は落ちて」（ドボルザーク『新世界より』）。その日の風向きによって、かすかに聞こえたり、はっきりと聞こえたり、全く聞こえないこともあった。近所の友達の家や小学校の校庭で時を忘れて遊び興じていた幼ない日々、私自身や遊び仲間にとって、それは、遊びの時間はもうお終い、家に帰る時間だよ、と告げるメロディーだった。

成長するにつれ、＜家に帰らなければならない時間の合図＞ではなくなったものの、そのメロディーが聞こえれば、えっもう5時なの！と気づかされたり、その逆で、なーんだまだ5時かぁ！と、一日の長さ（つまりは自身の昼時間の充実度であったりもした）をはかったり、その時節折々の夕刻5時の物理的明るさや暗さで、春夏秋冬の移ろいを感じたり、していた気がする。

私は26歳の結婚、はじめて岡山を離れ、横浜、宮崎県、茨城県、また再び横浜と6、7回の主人の転勤による引越しを重ねてきた。今年、岡山での26年間と同じ歳月の結婚生活（＝異郷での生活）が過ぎた。今でも、年に2、3回は帰省するが、実家は、岡山駅から徒歩で10分も行かない中心部にあるため、その変容ぶりは、すさまじく、ホテルや商業施設がニョキニョキ高層化し、地方の大都会に変身、成長を遂げた。ふるさとの発展は嬉しく、誇らしいものの、空き地などまったく姿を消し、だいたい遊びの場でもあった母校の小学校は、ドーナツ化現象による児童減少のため数年前に廃校となってしまうなど、寂しく感じることも多い。私の両親もすでに鬼籍にはいった。

しかし、今でも岡山市内に居て、夕方、風向きによって鮮明にあの ♪ミーソソ・ミーレド～♪ が聞こえてくると、あーこれだけは50年以上変らぬままずーっとこ

の地域に住む人たちに5時を知らせているんだぁと思い、ふと立ち止まり、胸にじーんと染みいってくる調べに耳を傾け、「変らないもの」に安堵し、心が落ち着いてくるのを感じる。

そこに住み続けていると当たり前すぎて、良さ、ありがたさが分からず、離れて初めて気づくことがよくあるが、まさに私にとって、ふるさと岡山市の夕刻5時の「遠き山に日は落ちて」がそれで、いつまでもいつまでも変らず、流れ続けてほしいと思うメロディーである。

ところで、私には二人の娘がいるが、その娘たちが幼い日々を過ごした地、わずか4年あまりしかいなかった宮崎県延岡市にも夕刻5時を知らせるものがあった。市内真ん中に位置する城山公園から聞こえてくる鐘の音である。この鐘は早朝6時から正午を含め、夕方5時まで数回鳴っていたと思うが、やはり風向きによって、聞こえ方に大小があった。ゴーン・ゴーンの鐘の音の時報は、やわらかく、穏やかなもので、とても心地よかった。

延岡を離れ、もう15年以上経ち、訪れる機会もなく過ぎてしまったが、忘れがたい音で、こちらも、いつまでも絶えないでほしいと切に思う音色である。（横浜教室・ボランティア）

楽しいバスハイク

山田 拓

ユッカの会で行われた一年に一度のバスハイクは11月18日（日）となった。

中国帰国者とその家族が多く、全部で200人くらい、4台のバスに乗った。以前より今年は一番大勢になった。

もう秋の終わりになったので少し涼しかったが、しかし天気はよかったので皆気持ちがよかった。

このバスの目的地は富士山の近くの山中湖だった。湖はいろいろあるが、富士山の横の山の中にあるこの湖はとても広く、湖の表面にはいろいろな小舟がたくさん浮かんでいた。

また、釣りの人もたくさんいた。湖の周りの山の上に紅葉が見え、綺麗な秋の景色だったので、私はうれしかった。

山中湖の公園も綺麗だったね！。色々な花や水車や滝などがとてもきれいだったので、写真をたくさん撮った。

バスに乗ってる時間がとてもながかったが、実はバスの中で久しぶりにふるい友達に会って親しくおしゃべりができた。また、歌を歌うのがすきな人は中国語と日本語で歌を歌った。バスの中にうれしい歌声が溢れて、とても楽しかった。

ユッカの先生とバスの運転手さんに感謝をいたします。どうもありがとうござい

ました。（地域教室・学習者）

日記から

今井 由紀子

今日は観光の日、あさから天気は青空です。すごくいい天気です。高速道路の両側の山はところどころ紅葉で、太陽の光が照ってとてもきれいです。赤、青、黄色と非常に鮮明で私たちの心をよろこばせました。バスの中で歌が始まりました。一曲、一曲と歌いましたが、紅葉の歌、故郷、だれもわからない。

ギャラリー水源の森はほんとうの自然ではありませんが、建物のなかでほんとうの清流が山の上から流れていました。

花の都公園、水辺の公園、皆さん楽しんでいます。花が満開で蘭のはながきれいです。しかし、花のなまえはわからない。山中湖はほんとうに観光的なところです。

きょうは、ほんとに楽しかった一日でした。（地域教室・学習者）

二人の学習者

ユッカの会で日本語ボランティアをしてかれこれ13年近くになるが、その間小学生から社会人まで多くの人との出会いがあった。ほんの一寸の間のお付き合いだった人もいるし、途中休みながらも10年以上続いているひともいる。それらの人々の一人一人の記憶はずっと忘れがたい思い出として私の心に刻み込まれているが、いまお会いしている二人は多分一番印象深い二人になるだろう。

Ｙさんは78歳。これまでで最高齢の学習者だ。この方は色々な難病を抱えていて今ではほとんど外出も出来ない状態なので、私が自宅へ伺って学習のお手伝いをしている。子供の頃日本人の小学校に通ったこともあるそうだが、もうほとんど覚えていないそうだ。中国では大学でロシア語と英語を教えたこともあるという知識人で、中国語で書かれた日本語の学習書を沢山持っていて、ぎっしり書き込まれたノートはこれまで勉強してきた努力の成果を物語っているが、ただこの数年外の接触がほとんどないため、せっかく覚えた言葉もどんどん忘れていると嘆いている。私が行くといつも勉強の準備をして待っていて、学習意欲はちっとも衰えない。毎回復習していないことを詫びるのだが、体調が思わしくないときもあり、無理せずゆっくりやりましょうと慰めるとほっと笑顔になる。時には中国語を交えてのおしゃべりにもなり、この2時間はＹさんにとって楽しみな時間となっているようで、私もうれしい時間だ。どうかお体を大切にして少しでも長くお付き合いできるようにと祈っている。

Ｓちゃんは2歳になったばかり、もちろ

んこれまでで一番小さい学習者だ。正確に言うと彼女のお母さんが学習者なのだが、出会った頃は1歳半だったＳちゃんが間もなく2歳のお誕生日を迎えてちょうど言葉を覚える時期にさしかかり、お母さんと一緒に来て私と遊びながら少しずつ日本語を覚えてくれるのがなんともいえず可愛くて、ついお母さんの学習よりもＳちゃんのほうに力がはいってしまう。いま私を悩ませているのは、2歳の子どもをあいてにして、ついつい幼児語を使ってしまうことだ。「ワンワン」「ニャアニャア」「ブーブー」ではなくてはじめからきちんと「いぬ」「ねこ」「じどうしゃ」と教えるべきだろうか。でもこの子が保育園に行くようになったら、他の子どもたちが使っている幼児語を聞いたとき戸惑うのではないかなどと考えてしまう。ともかく今は私が教えてあげる単語を鸚鵡返しにお母さんより正確に発音する子と遊んでいると、まあどっちでもいいかとおおらかなきもちで相好を崩しているおばあちゃん先生である。（横浜教室・ボランティア）

美人林

日向　和子

11月11日新潟県十日町市にある、十日町市立里山科学館「森の学校」キョロロ（キョロロとはアカショウビンという鳥の鳴き声からとったとのこと）で開催された「世界平和アピール七人委員会」の講演会に事務局の一人として参加した。

講演会の翌日、施設の中を案内していただいた。その中に「美人林」というブナの林があった。灰白色のきめの細かい樹皮の幹がすらりと伸び, 紅葉した葉をつけた枝の間から真っ青な空が望む。

風がすぎると日に照らされた葉が、キラキラと輝きながら舞い落ちる幻想的な林の中を、科学館の研究員の方の、「この森は、人が一歩あるくと靴底におよそ１千の微生物がつく、落ち葉についた微生物を昆虫が食べ、昆虫をもぐらなどの小動物が食べるという大きな食物連鎖をつくっている。」などの説明を聞きつつ、柔らかく積もった落ち葉の上を進む。この林は発芽の前年に伐採されたため、木の大きさが揃っていて美しいのだそうだ。カメラをすえてたくさんの方が写真を撮っていた。

出口近くに土手のようになったところがあった。落ち葉の中では見つけることが出来なかったブナの種を見つけることが出来た。三角錐をした小さな種であった。「食べられますよ」の案内の方の言葉に、池田香代子先生（「世界がもし100人の村だったら」の作者）が「おいしい…」、つられて皆、口に運ぶ…渋みが無くナッツのような味がした。

ブナは7、8年に一度１本の木がおよそ１

万個ものたくさんの種を落とすとのこと。なぜかというとブナの種は栄養が豊富なため、毎年少しずつ種を落としていたら、全部動物に食べられてしまう。

種の99パーセントは発芽しないまま動物たちに食べられ、発芽した１パーセントのうち99パーセントは育たない。ブナの寿命は300年くらいと言われているそうだが１本の木は300年の寿命のなかで１本ぐらいしか子孫を残せないそうである。途中、根元にもやしのような発芽後2年くらいのものを１本見つけた。無事成長して欲しいと思った。

前日の講演者のお一人、井上ひさし先生（劇作家）は、「世界の農業と日本の農業」と題した講演の中で、水の大切さに触れられた。樹齢100年くらいのブナの木は、１本で20万枚もの葉をつける。根元の腐葉土は樹齢200年くらいのブナの木で年間8トンの水を蓄えることが出来ると言われているそうである。

ガソリンが高くなり１リットル160円になったと騒いでいるが、最近はガソリンに近い値段の水を買って飲んでいる人が多くなった。

自然の水がめのような存在であったブナの木は、材木としてもっと有用な木へと植え替えられたが、自然の仕組みのほうが勝っていることに気づきはじめた人々が、あちこちでブナの種をまいて元の自然林を回復しようと頑張っていると、インターネットで見た。うれしい事だと思う。

林を抜けたところで、「美人林」の看板を眺めていらした伏見康治先生（元日本学術会議会長）が、そばにいた私に、「日向さん、ブナの林がなぜ美人林なの…」と聞かれた。「後で確認しますが、このすらりと伸びた姿が美しいので１本１本が美人なのではないでしょうか…」と、申しあげると―この答えは正解であった―「なるほど…」と木を見上げていらした。

伏見先生は今年6月白寿（99歳）のお祝いをなさった。林の入り口に東屋があったので皆が「お足元が悪いと思うので先生はここでお待ちください。」と申しあげたら、「大丈夫、行くよ」とご一緒に歩かれた。なんと申しあげたらいいのかわからない先生の魅力をまた感じたやり取りであった。

5月の連休のころになると雪に埋もれた美人林は、ブナの木が呼吸しているので木の周りの雪がとけてそこだけ穴があいたようになり、木の上の枝は新芽の緑が美しく、今回の紅葉とはまた違った景色となり、アカショウビンがキュロロ～キュロロ～と鳴くとのこと…そのころまた行きたいと思う。

世界平和アピール七人委員会
http://worldpeace7.jp

森の学校キョロロ

http://www.matsunoyama.com/kyororo/

関心のある方はウエブサイトで検索してみてください。Yahooで、ひらがな入力しても検索できます。（横浜教室・ボランティア）

楽しかったバスハイク

廖 忠

秋が深まり、紅葉が色づいたころ私は家族と共にユッカの会のバスハイクに参加し富士山の近くの河口湖などに行った。

天侯に恵まれ快晴だった。少し寒いけれども、爽やかな晩秋の天気だ。朝八時半に出発した。ユッカの会の三谷先生は「你好」と中国語で挨拶して下さった。皆は最初驚いていたが、すぐ先生の気持ちが読み取れ拍手した。ユッカの会の学習者たちは殆どの人が中国語圏の人だということが分かっているから、先生はわざわざ中国語で挨拶されたようで、皆のことをよく理解なさっていることが汲み取られた。三谷先生は見学先と注意することを説明して、挨拶を「请多关照」という中国語で結んだ。皆はまた驚いて、「好」「すごい」と感嘆の声をあげ、拍手喝采した。

バスは都会を離れて、視野がどんどん広がってきた。遠近の山々が目に入った。広い青空は晴れ渡って、白雲がゆったり浮いている。山は連なっていて、木々の葉は緑、黄、赤に彩られている。広い天地に溶け込んでいるようで、心は思わず広くなった。

静岡県に入った。富士山の姿が目の前に現れた。山の峰はそびえて、頂上は白雪に覆われ、霧が絡んでいる。富士山の両側は緩やかに「八」の字形で広がっていく。裾野が美しく伸びている。普段見ている富士山と少し違う。遠いところでしか見たことがないが、遠くて山頂の積雪部分だけしか見られないので富士山の雄大さが感じられない。登ったことはあるが、砂礫だらけの地面に足を踏み入れても、美しい富士山の印象はぜんぜん浮かばない。此処からの眺めはちょうど良いところだと思った。富士山の魅力はなんとなくわかるようになった。富士山は日本で一番高い山だけあって、その雄大さを充分感じさせる。その反面、風になびいた美少女の髪のような緩やかな八の字の両側は富士山の優美さを伝えている。雄大さと優美さを融合させている。起伏にとんだ丘陵、精巧な庭園、清らかな渓流などはよく目にするが、富士山のように美しくて高い迫力がある景観は珍しいと思う。

景色を楽しみながら、バスは徐々に目的地に進んでいく。車内はしゃべったり、食べたりする人で賑やかで、和やかな雰囲気であった。

私の隣に清野さんという女性の方が座っていた。明るくて、陽気な性格があふれでている方のようだ。始めて会ったのにす

ぐに親しく話しかけてくれた。清野さんは食べ好き、しゃべり好き、笑い好き、遊び好きで、思うまま人生が楽しめているようだ。少し前に一人でイタリアに旅行に行ったそうで、自分の旅行の体験は身振り手振りで生き生きと語られた。少し大げさな口ぶりで「イタリア料理はおいしい～」と語尾を伸ばした声は充分にその美味しさを伝えていた。「毎晩、毎晩、ワイン、ワイン。町並みは旧くて美しい。イタリア女性は背が高くて、きれいだ。肌は白くて、きめが細いし、皆美人だ。男性もハンサムだし・・・」突然、声の調子が下がって来た。そして口を私の耳元に近づけ、「その中に好きな男性がいたの」と言った。聞こえた皆は、思わず吹き出した。清野さんは６０歳を過ぎたかな？まだ恋に落ちるなんて信じられない。まして今ご主人は隣に座っている。だから清野さんはひそかに皆にしゃべったのだろう。やっぱり冗談好きかな？ 同じ様な景色で少し退屈している車内にこういう人がいれば面白くなる。話しているうちに河口湖に着いた。

河口湖は富士五湖のひとつで富士山の麓にある。湖水は清く波がゆれている。湖面に三々五々ボートが浮かんでいる。風が吹いてきて、少し寒くなった。湖のほとりの紅葉はもう真っ赤になっていて、燃えるようだ。山梨県の名物である「ほうとう」を食べてから、また見学を続けた。次に訪れたのは「花の里」という所である。花を育てる花畑であるが、もう晩秋なので、咲いている花はわずかだ。見ると、秋なのにチューリップだけが寂しそうに咲いている。もちろん、「清流の里」は見所だった。山上から水を流して作られた崖に、それぞれのところから流れ落ちて滝になるのだ。池に水流が集り、清らかな池水になる。

バスで帰る途中でガイドさんに「後ろを見て」と言われて、振り向くと無数の光線が射していた。太陽はその時ちょうど富士山の山頂に輝いていた。これは有名な「ダイヤモンド富士」と言われている光景だ。眩しい陽光を浴びて、富士山全体は、はっきり見えなかったが、あの輝きは言葉では言い表せないほどの感動を与えてくれた。

日も暮れた頃、一日のバスハイクは無事に終わった。ユッカの先生達は年をとっても、一日中ずっと皆の世話をしていた。本当にユッカの会、先生達のおかげで楽しく一日を過ごした。皆感謝しつつそれぞれ家路についた。（横浜教室・学習者）

お花見

苏日娜

日本に来る前に、日本のお花見の様子をテレビや写真で見たことはありました。その時から、桜がきれいだなと思いましたが、この花がどうしてそんなに日本人の心を捕らえるのかは、私には分かりませんでした。

日本に来て、お花見に行きました。美しい桜と桜の下にいる人々の笑顔を見て、初めて分かりました。桜の下で家族が食べて、飲んで、笑っている姿を見て、感動しました。

忙しい生活に追われている現代人は、お花見を息抜きとして、家族と一緒に楽しんでいます。笑っている人の目を見ると、桜がとても美しく見えるのが分かりました。（横浜教室・学習者）

中国の親達の国語教育論

員 琳蓉

中国と日本とは、距離の面であれ、歴史上であれ、いずれも不即不離の微妙な関係のような気がしている。ヨーロッパ大陸と同じように、各国間の人員移動と国家の発展の歩みとは同時に進む事になっている。近年、中国のソフトウェアの業界の主流の一部は日本にあり、日本の多くの電子工業、食品業界、通商貿易も中国の南方に足を踏み入れているのが見られ、特に上海では、日本語は随所で耳にするほど日本人が増えてきている。同じように、日本でも中国人がどこにでも存在しているようだ。家族の一人が働く為に移動するきっかけで、家族全員も出国することを避けられず、それに伴ってついてくる最大の問題は子供の国語の教育問題である。

私が今いる団地では十分の一の中国人が居住しているそうだ。週末時もよく中国の人達が三々五々集まっている光景を見る事ができる。輪になってチャットしたり、ショッピングに行ったり、遊んだりで、とても賑わっている。このように、大人は大人、子供は子供の仲間に入る。ところが、中国の子供達が遊びに興じている時は日本語しか聞こえてこない。「郷に入っては郷に従え」と言う諺通りで、これはよく理解できる。けれども、どうしでも理解できない事は、多くの若い両親と子女とのコミュニケーションも日本語になっていることである。大人が日本語をどれ程良くできても、日本人のような程度に達するわけがないだろう。なぜ、未熟な日本語で、子供と交流する必要があるのだろうか。この現象はどうしてだろう？若い両親はどのように子供の国語教育を見なしているのだろう？

私の考えでは以下のような分析になると思う。

1、中国は発展途上国で、まだまだ沢山の事が進歩していないので、中国語を喋ったら他人に嫌われると気にする事からである。しかし、果てしなく長い歴史の流れの中で、万事万物はすべて途切れなく変遷するので、歴史も永久に変わらないのではない。わが国は、過去数千年の中で世界の文明をリードし、推進させてきたことがある。しかし、近代の百年の中では未だ世界の発展国より遅れている。歴史的角度から見ると、この百年と数千年と

を同時に論じると、近代の百年の遅れはたいした事ではない。更に現在の中国の経済は着実に発展しつつある中で、近い将来中国も今の日本のように発展した時、中国人として、中国語をわからない事は、非常に可笑しい事だと感じさせるのではないだろうか。

2、子供は小さい頃から日本の教育を受けているので、毎日日本語ばかりで、中国語の環境がなくなり、喋りたくなくなっている。この点は軽視してはいけない。子供が日本語ばかり喋る事を変えてはいけないのではない。親達の最も重要な役目は中国語や中国文化を勉強する環境を作る事である。自発的に中国語で子供と話し合い、ストーリを一緒に読み、中国語の番組を見せ、子供と更に多くの一緒にいる時間を作り、中国語の難度と深さを意識させることである。そうすれば、中国語の面白さ又豊かさを感じさせるようになる筈だ。中国語が話せる華人はアジア、東南アジアの各国各地だけではなく、ヨーロッパ、米国等至る所に及んでいる。東南アジア各国の華人の後裔を例にとれば、数多くの子供たちは幼稚園に入ってから少なくとも四種類の言語の正統的な教育を受けているが、その中の一つは中国語の「普通話」である。中国大陸から来た子供達は中国語を当然話すべきだ。私は日本にいる韓国の子供達に会ったことがあるが、彼らの間では全て韓国語であった。また、インドの両親達が自分の子供を連れて街頭を歩いているのに出会ったこともあり、彼らが話すのはインドの言葉であった。これは最も自然に思え、最も理解することができる事である。

3、美しい中国語と優れた中国文化を認識していない事。歴史の長さと言語の豊かさとは正比例であるべきである。中国の堂々たる五千年の歴史の中には、数えきれないほど歴史上の人物が出て、これらの人物と事件が生んだ名言と文化は、近代社会の貴重な財産でないものはない。日本では中学校に入ってから漢詩を教えているが、いわゆる漢詩は中国の古代の詩歌と古文である。これにより分かることは、中国語は昔から日本語の進化と発展に対して軽視してはいけない作用をも発揮してきたことである。現代の日本人は、中国の文化と中国語に対して非常に詳しい人が少なくない。これに加えて、中日間の交流が盛んになるにつれて、中国語をまじめに学習する日本人はますます多くなっている。中国の子供たちは、本来は良好な中国語の家庭環境があるのに、無駄にし、捨ててしまって有効に使わないのは、本当にもったいないことではないだろうか？

4、親達が子供をずっと日本で暮らさせようと考えている事である。将来の社会は国際的に規模の大きい社会に向かうので、二つか三つぐらいの外国語ができるのは普通の事になるだろう。たとえ日本で生活するとしても、ただ日本語と英語とが話せるだけで、新世紀の現代人だとは思わない。中国はとても広い経済市場であり、まして、中日間が一衣帯水の関係にあり、将来たとえ中国に帰らないと

しても、成人してからの子供達の仕事が中国と全く関係がないという事は否定できない。将来中国語を使う時があれば、中国の名前を持つ子供達は、正しい中国語が出来なくて、本当に情けない目に遭うだろう。

中国語が難解な物と言った敷居の高さを全部はずし、子供たちが興味を持てるかどうかはともかくとして、親達は子供に対して国語の教育をすることを深刻に考える課題にするべきだと思っている。（横浜教室・学習者）

私の故郷

青木 きん

私の故郷の大連は「北の香港」ともいわれ、風光明媚な大変美しい港町です。

三面を海に囲まれ、四季がはっきりと移り変わり、気候はとても快適です。中国北方の都市の中でも特に環境にすぐれ、緑も多く、保養地、避暑地としても有名です。

また、中国の中で国際的なファッション都市、体育の盛んな都市、歴史のある街として知られています。

大連と日本は昔から、官･民両方で経済、文化等の交流が頻繁に行われてきました。現在、特に大連郊外の大連経済開発区には、多くの日本企業が進出し、その事務所や工場がたくさんあり、在住の日本人も大勢います。

ところで、私の故郷の家の近くに、「大連八景」に選ばれている観光地で、星海公園という有名な海浜公園があります。子供の頃、よく行って遊んだり、泳いだりしました。潮干狩りもしました。日本で潮干狩りといえば「あさり」ですが、それ以外に、ほら貝や日本の牡蠣に似た貝も採れ、その場で採れたての生のを美味しく食べたり、小蟹や小海老は、家でから揚げにしてもらい、おやつのようにたくさんつまんで食べました。また、運良く、大干潮の時には、なまこが採れることもありました。親戚やその知人、合計30人くらいで車４，５台に分乗し、にぎやかに一日中遊んだことは、本当に楽しく、忘れられない思い出です。

当時は広い砂浜の続く海辺でしたが、今現在は大きな遊園地ができ、ジェットコースター、観覧車などにも乗って楽しめる有料の公園になっています。昔とすっかり様変わりしましたが、海は今でも澄んでいてとてもきれいです。

私の大好きな大連。みなさんも機会があればぜひ行ってください。そして、星海公園にも足を運んでもらいたいと思います。（横浜教室・学習者）

鳥の話

シュワブ 礼子

話は五十数年前の昔にさかのぼります。鳥が行動を通して自分達の意思を人間に伝えようとするのを初めて経験したのは、横浜の実家でチャボを飼っていた頃のことです。チャボは鶏の一種ですが、鶏より小さく、金茶色の混じった羽色の美しい鳥です。チャボは日中は自由に庭を歩き廻っていました。当時は寒くない限り家のあちこちを開けっ放しにしてありましたので、チャボは家に遠慮なく出入りし、床の間や立てかけてあったテーブルの上に卵を産んでいくのも珍しいことではありませんでした。それでもチャボはやがて雛を育て、鳥の数も増えていきました。

ある日の夕刻、たまたま玄関口に出たところ、チャボの一家が親鳥を先頭に列をなしてこちらに歩いてくるのを眼にとめました。もう小屋に入って眠る準備をする頃なのに、どうしたのかしらと思い、小屋に行ったところ、戸が閉まっていました。何かの拍子に閉まってしまったのでしょう。戸を開けると私の後からついてきた鳥の家族は順序よく小屋に入り、夫々の場所に並んで座りました。「おやすみなさい」と言って戸を閉め乍ら、私はチャボに一入親近感を覚えると同時に、ほのぼのとした満足感を味わったことでした。

庭に来る野鳥と親しくなったのは最近のことです。私は現在米国のヴァージニア州最大の都市、ヴァージニア・ビーチに住んでいます。幸い緑に囲まれ、裏庭は入江に面していますので、各種の鳥を楽しむことができます。今春は裏庭に格別に多種類の小鳥が訪れました。紅冠鳥、青い大かけす、駒鳥、みそさざい、はち鳥、つぐみ等々です。

前庭では紅冠鳥が木に、駒鳥は車庫の外燈の上に巣を作り雛を無事に育てました。

近年は汚染のためか、入江のお魚の数が減り、従って水鳥の数は少なくなりました。卵がかえらないようです。それでもまだ鴨を始め白さぎや青さぎが姿を見せ、さぎがお魚を丸呑みにするのを眺めることができます。七、八年前には一月か二月に、カナダ雁（雁の一種）が何羽も庭にやってきて、主人と私は時々餌をやっていました。その中に一羽右脚の悪い雁がいて、餌を食べようとすると仲間に突っつかれたり、横取りされたりしていました。鳥の世界にも「いじめ」があるようです。

その脚の悪い雁が、連れ合いと水の向こう側の土手に巣を作り出したのは数年前のことです。雁夫婦は生涯連れ添うとのことです。彼等はその土手の近辺をはじめ、私達の裏庭も自分達の領土とした様子

で、それっきり他の雁は私達の庭に来なくなりました。

雁達は一日中あちこちで餌をあさっているようですが、夕方になって二羽が庭に来ると、多種の穀類で作られたパンをやっていました。最初は私達の周囲では用心している様子でしたが、間もなく私達の庭仕事用の革手袋をはめた手から、ガツガツと食べるようになりました。一昨年の春は雨量が少なかったので、他所で餌を充分に見つけられなかったのでしょう。庭に来ると花壇に入り込み、一センチ位伸びた花の芽を一つ残らず食べてしまい、少し遅れて出てきた芽もすっかり平らげてしまいました。毎年花壇に溢れるように咲いた花はそれっきり姿を消しました。花を失い、フンだらけの庭は、地雷が埋まっているかの如く、注意しなくては歩けなくなったものの、雁達は「我が家の雁」となり、私達が居間にいると二羽でやってきて、メスがガラス戸を嘴でノックして餌をねだるようになりました。

メスの雁が巣に座り出すのは、三月の末か四月の初旬です。卵を生むとメスは食べるために短時間巣を離れる以外は、日夜巣に座っています。一方オスは、水中から又は私達の庭からメスを見守り、食べる時間になると、鳴声によってメスに合図し、しばらく餌をあさると、メスに巣に戻るようにと言うのでしょう、ガーガーと鳴いて後から追いかけるようにして巣に帰らせます。まるで時計を持って歩いているかのようです。去年は幸いにも五月の初旬に五羽の雛がかえり、二、三日すると両親に教えられて、よたよたと土手を降り、ピョンピョンと水に飛び込み、巣立っていきました。

今年の四月の末の或朝、居間のカーテンを開けると、雁の巣が空っぽなのに気が付きました。不思議に思っていると、三日後メスが単独で巣に現れました。恐らく夜卵を狙って襲った動物（この辺にはアライグマや狐が住んでいます）から巣を守ろうとして闘ったオスは、殺されたか、ひどく傷ついて死んだのでしょう。可哀相に全家族を失ったメスの雁は、ガーガーと鳴いては辺りを見廻していました。オスの死を目撃したのか、しなかったのか知りませんが、彼女が今は亡き連れ合いを呼び、探しているのは明らかでした。人間の社会でも愛する人を失った人々が、亡き人を「探して歩く」のは極めて自然なことです。その後もメスの雁は巣に戻ったり、私達の庭に来たりしてはオスを呼び、彼が現れるのを待っているようでした。長時間立ちつくしていました。パンを食べさせながら、その一時が、連れ合いの死を信じられず、困惑し、悲嘆にくれている雁に少しでも慰めを与えるようにと思ったことです。

五月の末近く、彼女は珍しく朝早く現れたので、パンをやった後「お昼を食べに

いらっしゃい」と言ったところ、お昼にやって来ました。今度は「夕飯にいらっしゃい」と言い残して家に入りましたら、夕方四時頃やって来たのでびっくり。私の言ったことが分かったのでしょうか。その夕刻遅くなって彼女が又戻ってきたので、私がじっと座って眺めていると、ガラス戸の近くまでやって来て一歩段を上がると、長い嘴をガラスにピッタリつけ、強くノックして去って行きました。一日三切れのパンをやれば充分と、その時は出て行きませんでしたが、それがメスの雁が訪れた最後となりました。後になって考えると、彼女は「さようなら」を言いに来たのでしょう。人間の誠に自分勝手な解釈ですが。

それから間もなく、この近所にいた雁達は鳴声を後に、みんな飛び去り、それっきり雁の声は聞こえなくなりました。来年又帰って来るでしょう。「我が家の雁」は別の雁と結ばれているかも知れません。そうだとしたら、脚の悪い同伴者がいなくては、例の雁であるかどうか私達には見分けがつかないことでしょう。でも、又帰ってきたと知らせるために、ガラス戸をノックするかもしれません。

活動の原点を忘れないで・・・・

中 和子

～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～

（ユッカの会 事務局長）